

---

# とある魔術の薔薇十字（ローゼンクロイツ）

和三盆

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある魔術の薔薇十字  
ローゼンクロイツ

### 【Nコード】

N7174H

### 【作者名】

和三盆

### 【あらすじ】

「おじいちゃんは何でもできた…。それに比べて俺は…」みん「いままで、多くのものに飽きて、投げ出してきた少年、雲井透<sup>くみせ</sup>。彼はある日、街中で薔薇の棘のように鋭く強い眼をしたゴスロリの少女を見かけた。『日常』と『非日常』が交差するとき、雲井透の物語は始まる！」

## 序章 幼少の思い出、おじいちゃん（前書き）

小説を書くのは初めてです。

自分にしては、かなり頑張っています。

温かく見守ってください。

お願いします。

## 序章 幼少の思い出、おじいちゃん

「とある魔術の薔薇十字」ローゼンクロイツ

序章 幼少の思い出、おじいちゃん

おじいちゃんは面白い人だった。

おじいちゃんはいつも様々なことで小さかった俺を楽しませてくれた。

おじいちゃんは何でもできた。

おじいちゃんは昔の俺にはできないようなことを軽々とやってのけた。

おじいちゃんいわく、

「透ならすぐできるようになる」

はつきり言って謙遜けんそんにしか聞こえなかった。

おじいちゃんは何でも知っていた。

おじいちゃんの持っている古い本を読もうとすると、わけがわからなくて頭が痛くなった。

おじいちゃんはそんな俺のために、その本の内容を分かりやすく説明してくれた。

おじいちゃんいわく、

「透ならすぐにわかるようになる」

俺は今でもその本の内容を完璧には理解できていないというのにおじいちゃんは何でも持ってた。

おじいちゃんの倉庫には不思議なものがたくさんあって、おじいちゃんはその中の何個かを俺にくれた。

おじいちゃんいわく、

「透ならすぐ使いこなせるようになる」  
はいはい。

多分、俺が五歳のころの夏。

おじいちゃんは突然言い出した。

「透、おじいちゃんといると楽しいかい？」

「うん」

おじいちゃんが大好きだった俺は即答した。

「透、毎日が楽しいかい？」

「うん…」

幼いなりに友達と喧嘩けんかしたり、嫌なことがなかったわけではないので俺は首をかしげた。

「そうか、だが大きくなったらそれ以上につらいことにも出会っていくだろう。その時にはもうおじいちゃんはいないかもしれない。

だが、そういう時は自分の『理想』を大事にして孤独こどくでも頑張るんだよ。透、君は名前の通り透き通った力と透き通った目を持っている。君ならきつとできる。」

おじいちゃんがいなくなるなんて想像もできなかった俺は大して考えずに大きくうなずいた。

「うん！」

その秋だったと思う。

おじいちゃんが急に死んじやったのは。

俺はおじいちゃんの遺体いたいの前で泣きじゃくりながら

「おじいちゃん、僕、言われたとおりに頑張がんばるから！」

とか言ったりしたのだが…

序章 幼少の思い出、おじいちゃん（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第一章 魔術、ゴスロリ（前書き）

## 第一章 魔術、ゴスロリ

### 第一章 魔術、ゴスロリ

それから約十年後

とあるアパートの二〇七号室にて

「たすけてー！おじいちゃん！」

それが雲井透くもいとうが八月二十日に最初に言ったセリフだった。

雲井透は英語の問題集が一面に拡げられた机の上に突っ伏してため息をついた。

（まさか、高校生になって初めての夏休みからこんなことになるとは…っていうかなんだこの量！

絶対終わらねえ！）

雲井透がいま取り組んでいるのは、いわゆる夏休みの宿題である。

夏休み初日にかなり頑張った代わりにそれ以来ノータッチだった宿題がいま雲井を苦しめている。

現在、午前十二時三十分。

雲井の高校は、二学期の始業式が八月二十五日なので、宿題の提出日まであと五日しかない。

雲井透は残っている宿題の量の多さに気付いた十九日の午後六時三十分から、現在までの六時間の間、火事場のくそ力のごとき集中力で夏課題という悪魔に挑んでいたが、さすがに力が尽きてきた。

（どうしよう…解答とか渡されてないから答えまる写しとかできないし…ああ！もう！もう少し計画的に夏休みを過ごすべきだった！）  
今更、嘆いてもどうにもならないことを理解しつつも頭を抱えてうなる。

「やるしかないか…」

不安を紛まらわせるようにひとりごとをつぶやき、彼は自らの戦場へと向かう。





ズズズズ… がちゃり、がさごそ、ひでぶ、がさがさ、がやがや、

「おい、それもつと丁寧<sup>ていねい</sup>に運べ！」

「すいませーん！」

「これ、どこ置きますか？」

「そこに置いとけ！おい、新入り！たらたらしてんじやねえぞ！」

「す、すすすいませんでした！」

隣の部屋から耳障りなものを運ぶ音とむさくるしい男たちの怒鳴り声<sup>どなごえ</sup>が聞こえてくる。

空き家だったお隣の二〇八号室に誰かが引越してくるらしく、引越し業者の方々が暑いなか頑張っているらしい。

これがただいまの雲井のストレスの原因ランキング一位だった。

世の引越し業者の人々のために言っておくが、いつもの雲井なら別に気になるほど騒がしいというわけではなかったが、ただいま雲井は極限状態である。

徹夜明けの頭には、物音や人の声、足音がどうしても響いてくる。

（このままでは気がくるってしまう。早く宿題を終わらせないと…由生に宿題を見せてもらえばすぐ終わるけど、あいつに聞くのはちよっとなあ…。どうしようかなあ…）

ズシン！

どうやら、引越し業者の方の一人が大きめの荷物を床に落としてしまったようだ。

「おい！大きな音たてんじやねえ！近所の方々に迷惑だろうが！」  
まとめ役らしき人の大きな声が頭に響く…

雲井は少し考え

「…よし、由生に電話しよう」

緊急手段を使うことにした。

とあるフアミレスにて

「透く、またお前宿題が間に合いそうにないのか？」

朝食にサンドイッチを食べながら雲井は向かいの席に座っている男の話を聞き流す。

「お前中学の時も俺に宿題写させてもらってたる？高校生になったんだからもう少しさ、頑張れよ」

この雲井に説教している少年は由生新ゆゑあらたは雲井の中学校一年生からの知り合いで、通っている高校も同じの腐れ縁である。

由生はいつも宿題をきつちりやってくるタイプなので、雲井は由生ならもう宿題を終わらせているだろうと思いい、朝食を奢るかわりに宿題を写させてもらおうとしたのだが…

「まったく、一人で宿題も終わらせれないまま社会人になったらどうするんだ。大人になってからもお前の面倒をみるなんて俺には出来んぞ。俺たちは今は子供だから少々は甘えることはできるが、大人になったらそうはいかんぞ。いまのうちに言っておくが、お前このままでは本当に一人で社会で生きていけなくなるぞ。時間は十分にあっただろう。もっと計画的に時間を使わないと夢もかなえられなくなるぞ」

この通り、由生は話が長いのである。

雲井が、あれほど宿題に苦しめられていたのにすぐに由生に助けを求めなかったのはこれが原因だったのだ。

一応、由生は純粹じゆんじゆんに雲井の行く末すえを心配しているようで、言葉の中に悪意は込められてはいない。しかし、どんな思いであろうとも長すぎる話はうつとおしい。

朝礼のごとく長い説教は、ただでさえ徹夜明けで眠い頭をさらなる睡眠すいみんに襲わせる。

説教開始から五分後

ちなみに雲井の体感時間たいかんじかんは十分

「……………で……………だから……………であって」

雲井には由生のセリフが途切れ途切れにしか聞こえなくなってきた。

さらに五分後

ちなみに雲井の体感時間は二十分

.....  
もう意識を保つので精一杯である。

さらに五分後

「.....!!.....いい!.....おい

!おきろ!」

「はっ!」

由生の声で雲井は目を覚ました。

ちなみに雲井の体感時間は三十秒。理由は夢の中にいたからである。

雲井が寝ていたことに由生は文句を言おうとするが、説教を始める  
とすぐに雲井は意識を失ってしまう。

一度、睡眠のスイッチが入った頭には何も入らない。

由生が雲井を起こす、由生が文句を言おうとする、雲井が意識を失  
う、を何度か繰り返したのち、由生が根負けして

「まあ、疲れているみたいだから今日はこの辺で.....」  
と言って解放してくれた。

雲井は半分寝ながら、おせっかいな友人と朝食を食べてファミレス  
を後にしたのち、由生の宿題を借りてから別れた。

「うわあ...眠い...」

欠伸をして、アパートまでの道を歩きながら街の風景を眺める。

ふと、かばんのなかの宿題を貸してくれた仲間がさっき言った言葉  
が頭に浮かんだ。

「このままでは夢をかなえられないぞ...ね」

(夢…か…。夢なんてあんまりたいしたことないよな。夢をかなえられなかったら辛いし、かなえてしまったらすぐに飽きてしまう) 雲井は小学生のころ一人暮らしと都会にあこがれていた。雲井の地元は都会とは言い難かった。おじいちゃんがいなくなってからの生活はなんとなくつまらなかつたし、田舎に住む少年にとっては都会はまさしく夢の世界だった。だから、小学校を卒業したら都会で一人暮らしをすると決めたのだ。

当然、中学校で一人暮らしは危険だということで両親は反対してきたが雲井透はどうしてもあこがれの世界に住んでみたかったのだ。

透は両親を必死に説得して、都会の中学校に進学した。

都会に行つてからしばらくは、新鮮なことも多かった。ときどきホームシックとかになりかけたがなんとか耐えてきた。

そして現在、透はすっかり都会の生活に慣れてしまった。電車も、バスも、大勢の人々もいまでは面白くもなんともない。空気と同じの当たり前の日常となっている。いまでは田舎の生活のほうが面白そうに感じている。

雲井透にとって、都会の生活は夢だった。しかし、もう、その夢も透を満足させることができない。

中学校のころに入っていた部活も、最初は面白かったが最後には日常の一部分でしかなかった。

両親のいない自由な一人暮らしも、今となっては当たり前である。

雲井透は夢というものが、道德の教科書が言っているほど素晴らしいものでもないことを知る。透はもしかすると、自分以外の人々の大半は夢をかなえたあとも、その夢を素晴らしいと思うことができているのではないかと思つているが、自分は少なくとも、夢に満足できないと思つている。

多分、世界で最高の億万長者おくまんちやうじやになつても満足しないだろうし、世界の軍隊を相手にしても傷一つつかないぐらいの無敵の力を手に入れたら三日で飽きるだろう。ましてや、『魔神』とかになつて世界を思うように操れてもつまんだらと思う。

だからこそ、高校では部活に入らなかつたし、その学校に入学すれば『超能力』が使えるように『頭の開発』をしてもらえるという『学園都市』にも行かなかつた。

だけど、そんな透もまだ夢に見ていることがある。

（揺るがない『理想』を持ちたい…）

それはおじいちゃんの遺言でもあつたし、透自身の願いでもあつた。揺るがない理想があれば、このどうにもならない毎日も少しはましになるのではないかと思つた。しかし透は気づいていた。理想とは揺るがないものではない。自分で揺るがないように保ち続けるものだ。何事にも飽きてきた自分には到底持ち得ないものだ。

（さつさと宿題終わらせよう）

雲井はいきなりそう思つて家に帰る足を早めることにした。

さつきは少し自分の世界に入つてしまつていたが、今自分が一番に考えるべきは夏休みの宿題である。終わらない夢がどうであるかを考えている場合ではない。

早くアパートに帰つて、悪魔退治を終わらせようなどと思つていた時だつた。

「ん？」

その時、周りに妙な違和感を感じた。

「人が…いない？」

人がいない。周りが田舎のように人がいない。人の気配すらしない。いつもは聞こえない、風で街路樹の葉がこすれる音や自動販売機の作動音がやけに耳に入る。

腕時計を見て現在の時刻を確かめると、午前十時だつた。

かなり早めに昼食を食べる人もいるかもしれないが、それだけの理由で視力一・五の雲井から見渡す限り人がいなくなるなんて事態は起きないだろう。

「ま…まさか、俺以外の人間が宇宙人に連れ去られちゃつたとか…？」

宿題のこととかを考えていた『日常』の中に突然現れた『非日常』に圧倒されて馬鹿なセリフを口走ってしまう。

周りの異様な光景に不自然なほど恐怖心がわいてくる。しかし、雲井はそれを抑えた。その代わりにあることを考える。

（なんで、こんなことになっているんだ？）

雲井は何に原因があるのかと辺りを見渡す。

ふと、視界の端に一人の女性を見つけた。

「人いるじゃん。」

しかし、よく見ると自分と同じぐらいの年齢の少女であることに気づく。

女性といったのは、子供らしくない何かしまった雰囲気をもとっていたからだ。

どうやら外国の人のようで、金髪碧眼、白い肌で人形のような神秘的な印象がある。しかし、その眼光は薔薇の棘のように鋭く、人形にはない生命力がそこにはあった。

金髪は肩より下まで伸びていて、頭部の、白黒の配色の十字架に真っ赤な薔薇のつるを絡めたアクセサリーが金髪の黄金色を引っさ立っていた。

顔は絵画の中の女性のように整っていて、いわゆる美人であり、見ると少し顔が赤くなった。

そして服装は

「…ゴスロリ？」

マンガとかでお姫様が来ているような、ドレス？だろうか。深い森を思わせる緑の混じった漆黒の生地が、頭の薔薇のように真っ赤なレースで飾り付けられている。その服が少女の周りの空気を一層異様なものにしていった。しかし、少女はそのことを気にしている様子はない。少女は周りに人がいないことなど当たり前であるかのよううに、周囲を気にしてなかった。そのせいか、自分を見つめている雲井の存在にも気付いていないようだった。

少女は何やら張り詰めた表情で裏路地に昼でもなお暗い裏路地に向

かつて歩いていた。その姿はまるで戦に向かう軍人のようである。雲井を  
圧倒した。

そのまま少女は裏路地に入ってしまった。

雲井は少女の姿が消えてからしばらく固まっていたが、やがて少女  
の消えた裏路地に向かって動き出した。

(周りに人いないし、あの子ならこの状況の原因を知ってそうだし、  
おいかけてみるか)

そう思い、雲井は少女がいるであろう暗い路地裏に入ってしまった。

雲井が路地裏の少し奥に入るとあの少女ともう一人の誰かのものら  
しき声がした。

奥の突き当たりを曲がったところから聞こえてくる。

少女は緊迫した声でもう一人の人物から何かを聞き出そうとしてい  
るようで、もう一人のほうはおそらく初老の男性で、しわがれた声  
で少女をバカにしているようだ。

「お前たちの.....は.....

.....だ！.....の

.....を.....る！.....と

「.....の.....が！.....

.....ごときが.....

.....

な！

なにやら、ものが壊れる音や何かが発する音が聞こえてよく聞こ  
えない。

何をしているのかと角を曲がると...

「うわっ」

そこにはさらなる『非日常』があった。

「観念しろ！お前たちでは私にかなわない！」



「黙れい、『薔薇十字団』の雌犬めが！崇高なる我らの目的の邪魔をするな！」

少女と初老の男性はまだ何かを言い合っていたが、雲井透の耳には少しも入ってこなかった。雲井は、ただ目の前の光景に立ち尽くしていた。

少女は、日本語でも英語でもない文字らしきものが書かれた数枚のカードを手にしていった。

初老の男性のほうは、神社で神主が着るような服を着ていて、黒塗りの日本弓を持ち、弓を引くためのものらしき籠手を左手に装備していた。

少女が初老の男性に投げつけたカードの文字が輝き、その光から『氷』や『雷』、『水』さらには小型の『太陽』のようなものまでがつくりだされて、初老の男性に襲いかかってくる。

男性は矢も何も弦につがえていないのに、少女に狙いを定めて弓を引いている。

男性が弦を放すたびに、空気を切るような不気味な音がする。

雲井はあまりに『非日常』すぎるその光景に圧倒されてしばらく固まっていたが、しばらくしてここは危険だと判断し、気付かれないように逃げることにした。

しかしいきなりの事態に足がうまく動かなかった。

（やばい、動け動け動け！）

やっとのことで動いた足は思い通りに動かず、そばにあったゴミ箱を倒してしまった。

その瞬間、音に反応して初老の男性が瞬時に振り向き、雲井に向かって何もつがえてない弓を引いた。

「衝打の弦」

そんなセリフとともに放された弦が不思議なほど静かに鳴った。

本当に弦には矢も何もつがえられていなかった。自分のほうに向かってくるものも見えなかった。なのに、雲井はなんとなく思った。

（あ…俺、死んだ…）

見えない死まであと一〇メートル  
見えない死まであと五メートル  
見えない死まであと三メートル  
見えない死まであと一・五メートル  
見えない死まであと…

雲井透の頭に走馬燈そうまとうのような思い出が浮かび始めたそのとき、目の前に誰かが飛び込んできた。  
あの少女だった。

少女はあのカードを取り出して何かをしようとしたようだが、その前に少女の体に見えない何かが直撃した。  
吹き飛ばされる少女の体に巻き込まれて、雲井透も吹き飛ばされる。  
雲井は空中で考えていた。

（こ…こんなに吹き飛ばされるのは生まれて初めてかも…じゃなくて！な…なんでこんなことが起きているんだ。いきなり人がいなくなったり、カードからいろんなものが出たり、何もつがえてないはずの弓から何かが出たり、なにより…）

雲井は一緒に吹き飛ばされている少女を見る。  
（なんで無関係の俺を助けたんだ！）

路地裏の壁にぶつかって雲井と少女の二人の体は止まった。

初老の男性がつぶやく。

「魔力まりよくがない…。一般人であつたか…。一般人がなぜここに…？まあ見られたからには、ただでは帰せんもの…」

初老の男性は獲物にとどめをさすように、ゆっくりと、二人に狙いを定めて弓を引く。

少女は倒れたまま

「何故ここに一般人が…。『人払い（Opila）』のルーンが甘かったか。とりあえずここは…」

少女は素早い手つきで何かの文字が書かれたカードを取り出す。

そのカードの文字が輝きだし、その光が雲井と少女を包むと、初老

の男性は急いで弦を放した。

「断魔の弦<sup>だんまげん</sup>」

弓から放たれた何か<sup>何か</sup>が二人に届く前に少女が叫んだ。

「我らを指定した場所へと素早く連れて行け（TUTTPSQ）」  
見えない何か<sup>何か</sup>が二人に届く直前、雲井の視界は光に覆われ、ジェットコースターに乗った時のような無重力感に襲われた。

光が消えて、視界が自由になったとき、雲井は自分がさっきまでいた路地裏ではなく、別のどこかにいることがわかった。

「ここ…どこだ…」

あたりを見渡すと、どうやら部屋の中のようなようだ。普通にベッドがあって、普通にキッチンがあって、普通にテーブルがある。ただ一つ普通でないとすると、無駄なものがないということだった。例えば、ゲームやCD、雑誌など、日常になくても支障<sup>ししょう</sup>はないものは一切ない。そんな感じの部屋だった。  
しかし、どこかで見覚えがある気がする…

「ここは…私の家だ。」

少女が起き上がって答えた。

雲井は自分がさっき踏み込んでしまった『非日常』が気になって仕方<sup>仕方</sup>がなかった。

なぜ、人がいきなりいなくなったのか

なぜ、人がいなくなったのに自分と少女とさっきの弓の男性はいたのか

なぜ、カードからいろんなものが出てきたり、何もつがえてない弓から何か<sup>何か</sup>が放たれたりしたのか

なぜ、さっきまで自分たちは路地裏にいたのに、いつのまにこんな部屋にいるのか

しかし、そんな『非日常』よりも気になることがあった。

なぜ、少女は無関係な雲井を助けたのか…

それを聞きたくて、雲井は口を開く。

「な、なんで…」

しかし、言い終わる前に少女が飛び起き、雲井の目の前にあの不思議な文字が書かれたカードを突きつけた。

「なぜ、あの場所にいた」

その言葉は、雲井に一切の無駄話むだばなしを許さない迫力に満ちていた。

雲井は口を閉じ、どう答えるか考える。

嘘についても得をするかわからない状況の上、少女には助けってもらった恩もあるので、雲井は正直に、自分がどうしてあの場所にいたかを答えた。

「家に帰る途中で、気がつくと周りに誰もいなくて、そしたらお前が路地裏に入って行くのが見えたから、追いかけてみたらあんなことになったんだよ。」

目の前のカードはさっきのことから考えるとかなり危ないものなので、雲井は少し慌て気味に答えた。

すると少女はカードを雲井にさらに突きつけてきて

「嘘はないか！」

とさっきよりすごい迫力で聞く。

「は…はい！」

すっかり少女の迫力に圧倒されて、かなり慌てて答えた。

すると少女はカードを雲井から離して肩を落とした。

「やっぱりそうか…。魔力もないし、嘘をついている様子もない…。」

『人払い (Opilra)』が甘かったんだな…。全く…私は何をしているんだ…。」

少女は独り言を言って、一人で落ち込んでいたが、雲井には少女に聞きたいことがあった。

「なんで俺を助けたんだ？」

そう、それが雲井が一番に少女に聞きたかったこと。明らかに無関係な自分をわざわざけがを負ってまでなぜ助けたか…。それをどうしてもききたかった。自分以外の人が消えたり、何もなかったところか

ら氷や水や見えない何かが出てくる現象のことよりも…

その疑問に少女はいともたやすく答えた。

「人を助けようとすることに理由はいるか？」

その顔はさっきの覇気に満ちた顔ではなく、まさしく少女らしい、優しさにあふれた顔だった。

しばらく雲井が少女の答えにあっけにとられていると、少女は照れたように笑って

「いや、まあ理由がないというわけではない。私はあるものから一般人を助ける組織に入っていて、一般人を助けるのは私の使命のようなものだからな。君は巻き込まれただけのようだし…」

そう話す少女の表情や仕草はとても柔らかく、雲井は少女のさっきまでの雰囲気は表面で、こちらが少女の素なのであるとわかった。これ以上理由を追求するのは無粋だろうと雲井は判断して次の質問にうつった。

「なんでいきなり人がいなくなったりしたんだ？あの弓持ってたおっさん何者？そのカードも何？っていうか君も何者？」

よく考えてみるとこっちの質問をするべきだった。人がいきなりいなくなったり、いきなり殺されかけたり、いきなり瞬間移動したりしたのだ。普通なら少女がどうして自分を助けたかよりもこの意味不明な状況を理解しようとする。

しかし、この質問をすると、少女はまたあの恐ろしい雰囲気をまとった。

少女は言い放つ。

「それは知らなくていい。第一、一般人の君が知ってはいけないことだ。本来あれはみるべきでもない。」

そう言ってまた少女はカードを取り出して言った。

「君の家はどこだ？」

「は？」

突然の予想外の質問に雲井はつい聞き返してしまった。

少女は答える。

「これから君のさっきのことに関する記憶を消去する。別に副作用はないから安心しろ。住所を言ってくれば、そこに置いて言っ  
やる。そして君は元の生活に戻るんだ」

「は？」

さらなる予想外の返事に雲井はまた聞き返してしまった。

しかし、もう少女は答えない。

少女は取り出したカードを雲井のほうに突きつける。カードがあやしく光りだした。

「ま、待て待て。せめて状況を説明してくれー！」

雲井は確かに少女に助けられはしたが、名前も知らない少女に記憶を消されるなんていくらなんでも嫌である。

カードから光が雲井の頭に向かって放射される。

「どわあ！」

ギリギリのところまで光を回避して、雲井は玄関に向かって逃げ出した。

「こら！逃げるな！」

少女が雲井を追いかけようとするが…

バタツ……

何かが倒れる音に雲井が後ろを振り返ると少女が床に転がっていた。気付かなかったが、服の下は結構な重症のようで床は血の海になっている。

「お、おい！だいじょうぶか！」

大丈夫なわけなどないと知りつつ、そう叫んで駆け寄る。

少女は一応、息をしていた。しかし、医学の素人でもやばいとわかるくらいにかすかな息をしていた。

「さっきまでは普通に喋っていたのに…」

我慢していたのだ、雲井にいらぬ心配をかけないために、名前も知らないはずの雲井を元の生活に帰すために…

「馬鹿野郎！俺に何かできることはないか！」  
少女はかすかにだが息をしながら小さな声で答えた。  
「すまないが…私がいうものを部屋から取ってきてくれないか…」  
断るわけがなかった。

雲井が少女に言われて持つてきたのは、押し入れに入れられていた水と土。そこいらにある水と土にしか見えないが、何か特別なものなのだろうかと雲井は思ったが、雲井がきく前に少女は何かの準備をしている。

「お、おい！救急車とか呼ばないのか？」

雲井は医者を目指してはいたので医学についてはあまり知らないが、素人でもわかるほど、少女の出血は刻一刻を争うものだった。何をしようとしているかは分からないが、時間を無駄にしている場合ではない。

しかし、少女は確信をもった目で言う。

「大丈夫だ。すぐ治る。」

その声は弱弱よわよわしかったが、少なくとも嘘は言っていなかった。

しかし、出血のショックで変になっているだけかもしれないからとりあえず少女にここの住所を聞いて救急車を呼んでおいた。

「救急隊員の人に着たら、いいわけは君がしろよ」

少女はそんなことを言って何かの作業をしていた。

（こ、この野郎。人が心配しているのに…）

そんなことを考えながら携帯電話で救急センターにS Sを送る。

「よし…」

どうやら少女の準備ができたようなので、興味本位でのぞいてみると…

（何だこれ…）

さっきの土にさっきの水を混ぜてこねて作った粘土にアルファベツトらしきものを刻んだだけのものだった。

(Shem-ha-mephorash: なんだ?こんな英語、学校でまだ習ってないぞ?)

そのアルファベットがどういう意味かもわからないまま、雲井は少女のすることを眺めていた。

「我が体は生ける土(MBIALS)」

突然、少女が真剣な口調で何かをつぶやいた。

「我が血は清き泉の水(MBICWOLF)」

少女の言葉に反応して、粘土が淡く光りだす。

少女はゆっくりと立ち上がり、あの文字が書かれたカードを取り出して呟いた。

「炎よ(kenaz)」

すると、少女の体が紅く燃え上がった。ように見えた。よく見ると炎のような光をまとっているだけで燃えてはいない。

少女は光をまとった状態で何かを呟きだし、そのままブツブツと粘土の周りを時計回りにまわりだした。

その言葉はおそらく日本語ではなく、テレビで聞いたことさえもなかったが聖歌せいかのような美しい『音』だった。

粘土の周りを一周したときに彼女はふらついて倒れそうになった。

「危ないっ!」

ギリギリのところでは雲井は少女の体を受け止めた。

受け止めて近くで見た少女の顔は何らかの目的を果たそうという意志で満ちていた。

正直、雲井としては救急隊が来るまでゆっくりしてほしいのだが、ここで少女の作業を邪魔すると激しい抵抗にあい、少女も自分もさらにまずい状況になるような気がしたから、一応、少女が目的を果たす手伝いをするにしました。

「俺も手伝っていいか?肩を貸してやるよ」

少女は『音』を呟き続けながら頷いた。どうやら『音』は途中で中断してはいけないものらしい。

「ほら、つかまれ」



雲井は少女の手を自分の肩にまわし、少女を支えながら少女の歩調に合わせて歩く。

赤色の光をまとった少女の体はやけに暑かった。

その光は歩くことに小さくなっていき、少女の熱もそれに比例してちようど良くなっていた。

粘土はそれとは逆にどんどん赤く光りだし、何周かまわって少女が足と『音』を止めたときには火にかけた石炭のように真っ赤だった。少女はまた別のカードを取り出して呟いた。

「水よ (laguz)」

するとまた少女の周りにさっきの光をそのまま青色にしたようなものが現れた。

その光に触れると水の中のように涼しかった。

少女はそれをまとって、またあの『音』を呟いて粘土の周りをまわりだした。

光をまとった少女の体は冷たく、さっきの熱でほてった雲井の体を冷やしてくれた。

また何周かまわると少女はまたあの新しいカードを出して

「風よ (hagialaz)」

と唱えた。

次に出てきた光は緑色で、その光の中には嵐でも吹いてるかのような感覚があった。

また少女が『音』を呟きながらまわりだしたので、雲井は思わず

「またかよ！」

と叫んでしまった。

雲井が少女のほうを見ると、少女は、同感だともいいたそうな顔で苦笑いをしていた。

その顔が意外にもかわいらしかったので、雲井は目をそらしてしまっ

た。

雲井は、ふと思った。  
(こんなにまわり続けるなんて…。どっかの魔術の儀式みたいだ…)

また何周かすると、粘土はなんだか生きていっているような空気をまとっていた。

少女は『音』を何か意味のある『言葉』に変えた。

さつきまでの『音』は文法や単語が存在するのもわからなかったが、この『言葉』は意味は全く分からないが何らかの法則に従って紡がれてから放たれているように感じる。

「\*\*\*\*\* (神、生気をその鼻に吹きいれたまえり、)\*\*\*\*\*」

少女が意味不明の『言葉』を紡ぎ終わると、少女の頭の薔薇を十字架に絡めたアクセサリーが光り出し、その光がまるで煙のように薔薇十字から離れて粘土の中に入って行った。

すると少女は、はっと何かに気づいたように雲井のほうを見ると「お、おい。出て行ってくれないか」

と少しあわてながら言った。  
雲井はいきなりの申し出の理由がわからなかったので「なんでだよ」

と理由を聞いたのだが、そんなこともお構いなしに少女は「ああ、もう。時間がない！」  
と服を脱いで、上半身裸になった。

「……………」  
突然の事態に雲井の思考はしばらく固まっていたが、しばらくしてようやく

「は、はあ？なにしてた!？」  
と反応した。

しかし、そんな雲井の男の子特有の焦りと興奮もすぐに別の感情に上書きされる。

「うわあ……」  
少女の上半身はひどいことになっていた。

生の女の子の裸の上半身、しかも美少女のものなんて願ったところで拜めるものではないが、これはできることなら見たくはなかった。元々はふっくらとしていたと思われる少女の腹部は熟れすぎたトマトのように裂傷で赤く染まり、ところどころに内出血による腐ったように黒い痣ができていた。血は首まで彼女の体を染めており、どうしてこんな体で動けるのかと思うほどだった。

ここで雲井が逃げ出さなかったのは、さっきまでの『非日常』に感覚を麻痺させられていたからかもしれない。

雲井が言葉をなくしているとさっきの粘土が宙に浮いて、少女のほうに近づいて行った。

粘土は少女の腹部にくっつくと、傷を隠すかのように腹部を覆った。その後まるで生き物のようにグネグネと動いていたが、しばらくすると少女の体からはがれおちた。粘土が落ちた後に残った少女の腹部は傷一つない美しい肌色であった。

(……肌色?)

少女が顔を真っ赤にして叫ぶ。

「何を見つめている!」

雲井はとっさに首を一八〇度回転させた。さっきまで、自分が美少女の裸の上半身、首とへその間のところにも何もつけていない状態のものを凝視していた現実を雲井は受け止めきれない。

何とか顔を無表情にするよう心がけたが、顔が真っ赤になるのは抑えきれない。

「だから出て行けと言っただけだ……」

少女のあきれた声が聞こえてくる。

雲井は首を回転させたまま少女に問う。

「もう大丈夫なのか?」

「ああ」

少女は何事もなかったのかのように答えた。

「良かった……」

雲井は安堵しながらも、さつき目の前で起きた現象に今更ながら驚く。  
少女の傷は明らかに命にかかわるレベルだった。しかし、準備には時間がかかったが、その傷を瞬時に治し、何事もなかったようにする少女の所業は『非日常』の域にある。

（大体さつきまで科学的に説明できそうにないものに出会いすぎだろ。一体どうしてあんなことが起きたんだ？人がいきなりいなくなったり、路地裏からここにいつの間にか瞬間移動してたり…。『学園都市』の超先端技術か？そもそも、こいつの正体はなんだ？もしかして『超能力者』？いや、『超能力者』が『学園都市』の外に出るなんて聞いたことないし…。まさか、天然の『超能力者』の『原石』？だけどあれは都市伝説みたいなものだしな…）

雲井がそんなことをぐだぐだと思っていると…  
「すみません！遅れました！救急隊です！」  
緊張した雰囲気ですらドアをたたたく声がある。

（そういえば…救急車を呼んでいた気がする…）  
雲井がどうしようかと少女に助け船を求めると  
「さつき言っただろ？救急隊の人への言い訳は君がしろって。私は体にまだ付いている血を流すためにシャワーを浴びるから。せいぜい頑張つてこい」

「……………」  
（おじいちゃん…）

救急隊員の人に怒られながら雲井は思った。

（俺…何してるんだろ…）

「ちゃんと聞いているのか…！」

「は…はいいい！」

さらに怒られた…

「お疲れ様」

「ああ、疲れた」

説教から戻ると少女はさつきまでのゴスロリの服ではなく、普通の服を着ていた。普通の緑の服に、普通の青のジーパン。かすかにシヤンプーの甘い香りがしていた。

家の中ではゴスロリじゃないのか？というかなんでゴスロリだったんだ？いや、人の趣味に口出しするのはやめておこつ。

雲井は徹夜明けの頭でそんなことを考えていたが、少女はゆっくと立ち上がって、

「君には迷惑をかけたな。ありがとう。」  
と頭を下げた。

しかし、そのセリフは雲井のものであつて、断じて少女のものではない。勝手に巻き込まれたのは雲井だし、それを体を張って救ったのは少女だからだ。  
だから言う。

「頭を上げろよ」

少女が頭を上げると、雲井は素早く頭を下げて、

「ありがとうございますー！」  
と叫ぶ。

少女は、はっ？と言って困惑しているが、雲井は頭を下げたまま言う。

「感謝するのは俺のほうだ。お前は見ず知らずのはずの俺を助けてくれた。だからお礼を言わしてくれ。っていうかも言うたけどな」

雲井は思ったままの言葉を少女に伝える。

雲井が顔を上げると少女は笑っていた。

「君は面白いやつだな」

少女は部屋のベットに腰掛けて口を開いた。

「さて、何が知りたい？」

「あれ？もう記憶を消す気はないのか？」

「いや、記憶は消す。しかし、たすけてもらつておきながら、記憶を消す理由も話さないのは悪いだろつ。正直あまり気は進まないが

…」

「じゃあまず、なんで話そうとしなかったんだ？」

雲井が慎重に尋ねると、少女は真剣な口調で言った。

「君のためだ…。さっきも言ったが知らないほうがいい」

「なんでだよ」

「危険だからだ」

「危険？」

「そう危険。君が触れたのは本来社会の裏に潜むもの。普通の生活を送る君がそんなものを知っていたら、その知識を狙ってわたしの『敵』が君を襲ってくるようになる。」

「『敵』って？」

「聞いて後悔しないか？」

雲井が少し考えてからうなずくと少女は

「魔術師だ。」

と言った。

「……………」

(……………)

少女の言葉に驚き、雲井はしばらく何も考えられなかった。

少女がそんな雲井の様子を見て、かすかに笑いながら言う。

「信じられないか？」

雲井がそのまま、無言でいると少女は軽くため息をついて言う。

「まあそれが普通の反応だ。それに、君のためにも信じないほうがいい。」

その時の少女のほほ笑みは、なんだか寂しそうなのほほ笑みだった。自分の言うことなど誰も信じはしないだろうと決めつけている自嘲的な笑顔。

実際、この『学園都市』のおかげで世の中の何もかもが科学で証明された世界で魔術師なんて『非科学的なもの(オカルト)』を信じると言つなど無理なことだった。

しかし、雲井は首を振って答えた。

「信じる」

少女は驚いて雲井のほうに振り向く。

(そんなに驚くことか…?)  
と雲井は思う。

(あそこまで不思議な現象を見せられて全否定したら、そいつは頭が固すぎると思う)

なによりここで少女の言うことを否定したら、せつかく少女が話す気になってくれたのが台無しになってしまう。

少女はしばらく雲井を真意を探るように見つめていたが、しばらくするとまたほほ笑んで

「君は本当に面白いな」  
と言った。

「もしも私がカルト宗教の勧誘だったらどうするんだ。思いっきり騙されてるぞ。」

雲井は少し顔をひきつらせて

「こ、このやろう。人が信じてやってんのに…。そういえばさっきも心配して救急車呼んでやった人の好意を余計なことみたいに言うて…」

「フフツ」

少女は軽くふきだして笑った。

「君は素直だな。それはとてもいいことだ。だからこそ、これ以上話したら後戻りできない。それでも真実を知りたいか？」

雲井はゆっくりとうなずいた。

雲井は自分の置かれている状況を知りたかった、そしてもしかすると、記憶を消去される前にこの不思議な少女ともう少し話したかったのかもしれない。

「そういえばお互いの名前も知らなかったな。私はマリア。マリア

＝ローゼンクロイツ。つづりはMaria Rosenkreuz」

「俺は雲井透。空の雲に井戸の井、そして透明の透だ。」

「珍しいのか平凡なのか、どちらかわからない名前だな。」

「うるさい。」

「はは、じゃあ本題に入るが君は魔術をどういうものだと思ってる?」

「魔術…。なんでもできるんだろ?」

「マリアは優しく頭を振る。」

「違う。魔術はれっきとした学問なんだ。ちゃんと法則も常識も存在する。しかしそれが『違う世界』の『異常識』や『違法則』だから、この世界の法則や常識の『科学』とは相容れないんだ。」

「ふうん?」

雲井は適当に相槌を打っておいた。

「まあ、よくわからないだろうな。仕方がない。いきなり『違う世界』とか言われて、はいわかりました、なんていうやつは少し素直すぎて問題がある。まあ、ここからが問題だ。」

「頑張って理解してくれ。」

「ああ」

「さつき、私は魔術は学問だと言ったな。つまり、魔術は特別な才能がなくても学べば出来てしまうんだ。魔術についての教科書を、いわゆる魔道書まどうしょというのだがこれを読めば誰でも自分の生命力から魔力を精製して魔術が使えるようになる。しかもこの魔道書が根絶不可ふかだから、魔術師は増え続ける。もちろん、その中には魔術を悪用しようとするやつも現れる。だから、平和のためにそんな奴らを『狩る』組織も現れる。そういう組織を『魔術師狩り』という。『科学』側で言つと警察だな。」

「それでその『魔術師狩り』がどうしたんだ?」雲井は淡々(たんたん)と尋ねる。

「あまり驚かないんだな? まあいい。その『魔術師狩り』の代表的なのはイギリス清教の必要悪の教会ネセサリウスだが、私の所属しているのはそこじゃなくてな、『薔薇十字団』ローゼンクロイツという。」

「ローゼンクロイツ?」

「ついさつきどこかで聞いた言葉に、雲井は首をかしげる。」



「あ、お前の名前……」

「ああ、私の名前はマリア・ローゼンクロイツ。同じ名前だ。」

「なんでだ？」

「生まれたところからいたからだ」

「……………」

しばらく、沈黙が流れた。

（生まれたところからいた？『魔術師狩り』の組織に？つまり、それは魔術師と戦うためだけに生きているということか？自分の意思は関係なく……）

それはとても悲しいことのように思えた。

公民の授業で、世界には恵まれない子供がたくさんいます、と習っても実感が湧かなかつたが、目の前にそんな人がいるとなると急にせつない感情が浮かんできた。

「お前、大変だな……」

そんな人ごとのような最低の言葉しか言えなかった。

しかし、マリアは元から丸い瞳を更に丸くして

「なんでだ？」

と雲井に尋ねてきた。

そんなふうな返事が返ってくるなんて、雲井は思いもしなかった。

「えっ？」

「だから、何故私が大変なのだ？」

「いや、生まれたところから危険な運命を押し付けられてかわいそうだなあ……と思って」

「別にかわいそうじゃないぞ。私は望んでこうしているのだ。人々を悪い魔術師から守るために戦う日々、私は満足している。いつか、人々が魔術に巻き込まれることがなくなるのが私の『理想』だ」

マリアの声には嘘は交じっていないと雲井は感じた。マリアが、雲井から見たら危険な日々、不満を感じていないのは生まれた環境も原因の一つであろうが、雲井はそれ以外にも理由があるように思った。

彼女には『理想』があるのだ。ゆるぎない『理想』が。それは雲井には持ち得ないものであって、雲井にはマリアが少しまぶしく見えた。

「それで、なんであの弓持った魔術師のおっさんと戦っていたんだ？」

雲井は卑怯だと自覚しながら、マリアに比べて自分がみじめに感じたから話題を変えた。

マリアはそんな雲井の様子に気づかず、質問に答えた。

「やつらはさつき言った悪の魔術師だ」

「やつら？」

雲井が路地裏で見た人影はマリアと、雲井を殺そうとした弓をもった老人だけだったので、マリアがやつらと言う複数形を使ったことに違和感を覚えた。

「あのおっさんのほかに誰かいたのか？」

「ああ、やつは『魔術結社』の一員だ。」

「魔術結社？」

「ああ、『魔術結社』についてまだ説明しなかったな。『魔術結社』というのは魔術師の組織で、私の属している『薔薇十字団』も魔術結社だ。魔術師にいいやつも悪い奴もいるように、魔術結社にもいいものも悪いものもある。もちろん、あの梓弓あすなゆみの魔術師が属している魔術結社の『天孫降臨』てんそんこうりんは悪いほうに入る」

「その『天孫降臨』は何しようとしているんだ？」

「やつらいわく、日本を平和にしようとしているらしい。」

「ん？日本を平和に？それっていいことじゃん」

「方法が問題なんだ…」

マリアはため息をつく。

「さつきもいったが、魔術は危険なものだ。その力の大きさ、不安定さはもちろん、学ぶことにも危険が伴う。魔術を学ぶには教科書である魔道書を読む必要があるが、それは命を捨てるような行為だ。

魔道書に書かれている『ちが違う世界』の知識を知るだけで人間の脳や心は破壊される。それを防ぐには宗教防壁しゆきぼうへきで自らを守るしかない。日本の一般人のように宗教間の薄い人間が魔道書を読めば即死だ。さらに、魔道書の『オリジン原典』と呼ばれるものは、たとえ読んだ者が魔術師でも死にかねない。それほど魔術とは危険なものだ」

雲井は黙ってマリアを見ていた。

長い三十秒が過ぎ、またマリアは口を開いた。

「そんなに危険な魔術に手を染めるものは、大概、行き場を失ったものだ。どうしても叶えたい、叶えなきゃならない願いがあるのに、どんなに努力してもどんなに祈っても叶えてもらえない。そして、命を賭けてもその夢を現実に変えたいと思ったものがすりつくの、死と隣り合わせの究極の裏ワザ、魔術」

雲井はマリアが魔術を語るその横顔が自らの罪を懺悔ざんげする者のように見えた。少女の表情は罪悪感による切なさ<sup>と</sup>悲しさを必死に抑えているかのようにだった。

(ああ、そうか…)

雲井は思い出す。少女は生まれたときから『魔術師狩り』の組織にいたことを。

雲井は気づく。少女は、これまで自分の命を賭けてでも夢をかなえようとした魔術師を数多く葬ほうむってきたであろうことを。そして少女は、破れた願い達の悲痛な断末魔をそのすぐそばで聞いてきたであろうことを。

雲井は思う。少女はゆるぎない『理想』をもっている。その『理想』のために、少女は決して倒れないだろう。しかし、少女は確実に傷ついている。その『理想』は一人で背負うには重すぎる。

雲井のそんな思いには少しも気づかずに、マリアは話を続ける。

「だから、魔術師には願いのためなら手段を選ばないものが多いんだ。私がいま追っている『てんそんこうりん天孫降臨』もそのひとつでな、やつらは日本を『支配』することで日本を『平和』にしようとしているんだ。

まったく、暴走しすぎだよ」

「マリアはため息をつきながら、ベッドから立ち上がった。

「喋りすぎだな……。どうだ、魔術は危険だ。こんなことに関する記憶は消去したほうがいい。納得したか？」

「マリアが話しかけても、雲井はうつむいたまま答ええない。何か考え事をしているようだ。

「……？どうした？」

「もう一度マリアが話しかけると、雲井は勢いよくかおを上げて言った。

「俺にお前を手伝わせてくれ！」

「はあ！？」

「マリアは雲井の発言の意味がわからないようだった。素<sup>す</sup>つ頓<sup>とん</sup>狂<sup>きやう</sup>な声を上げるとしばらく固まっていた。

「そんなマリアの様子に雲井がもう一度大きな声で叫ぶ。

「俺に！お前を！手伝わしてくれ！！」

「そういつてからもマリアは固まっていたが、数秒後に

「話を聞いていたのか？」

「とかなり怒った声で言った。

「その声に雲井は内心ビビっていた。

（こんな怖い声で起こる女の子見たことねー！おじいちゃん！）

「と、こんな具合だったのだが、ありったけの勇気を振り絞って言い返す。

「聞いてたよ！聞いてましたよ！はい。魔術が危険で魔術師が狂っているってことを！だけどな！そんなに辛いことをお前一人が抱え込む必要はねーんだよ！」

「何を熱くなってる。現実を見る、夢見がちが！」

「お前辛そうだったじゃなか！！！！」

「！！！！？」

「その声にマリアの怒りの表情に困惑の色が混ざる。

「お前辛そうだった。魔術の話をしているとき、今まで倒した魔術

師のことを思い出してたのかは知らないけど、今にも壊れそうだった！しかもお前、俺と同じくらいの年齢だろ？なんで、そんな年で一人で抱え込んでんだよ！誰かに頼れよ！！」

透が自分の気持ちを言い終わると、少女はとても優しい顔になった。まるで、透のすべてを慈しみ、愛しているような、まさしく聖<sup>マ</sup>母<sup>リア</sup>の顔だった。

「ありがとう」

その言葉と表情に雲井は言葉が出なくなった。

「君は優しい奴だ。君の気持ちは嬉しい。けれども」

そういつとマリアは目にもとまらぬ速さで雲井の手首をつかみ、

雲井の背後にまわり、後ろ手に縛り上げた。

「わたしは君のような善良な人々を守るために戦っているのだ。悪いが君の申し出は了承できない」

マリアはカードを取り出し雲井の後頭部にカードの角をつける。

「君の住所は君の持ち物から見つけ出すよ。透、ありがとう。さようなら」

マリアは静かに別れの言葉を告げる。

カードが光り出す。

「舌噛むぞ」

雲井がそう言うのと、カードの光が消えた。

「え…なんて言った？」

マリアがかすかに表情をひきつらせていった。

「舌噛むぞ」

雲井はさつきと全く同じ口調で繰り返した。

「なんか体術では俺はお前になかなわないみたいだけど、舌を噛みちぎるくらいはできる」

雲井は可能な限り堂々と言った。心臓はバクバク鳴っていたが。

(こい、こいつ…)

マリアの顔はひきつったままだ。

雲井はできるだけ冷静に言葉を選びながら言った。雲井に舌をかみ



「ばっ！」

顔が真っ赤になった。

「あははははははははは！ばっ！だって、ばっ！あはは！次はびびぶへぼのどれが出るのかな？」

「なんなんだよ、も…」

一気に脱力した。これがさっきまでのあのマリアなのだろうか。

「ああ、ごめんごめん」

まだ笑っている…

「もうその手は食わんぞ」

警戒心マックスにして、雲井は次の奇襲に備える。

しかしマリアは笑いながら言う

「いや、もうしないから」

「その言葉、真か」

「…何その口調？」

どうやらもう大丈夫なようなので、雲井は警戒を解く。

「…で、さっきの話だけど…」

とマリアが真剣な口調に戻って言った。

雲井は

(さっきの話？ああ、魔術の話！忘れてた！)

とか思っていたが、

「いいよ、手伝っても」

それがマリアの回答<sup>かいとう</sup>だった。

雲井は、マリアが雲井を安心させておいて、奇襲で気絶させて記憶を消すのではないかと思ったが、

「君は私が絶対に傷つけさせない。命に代えても。実際、人手も私一人で足りなかったし、大助かり。その代わり、絶対私の指示に従うこと。一度でも私の指示に背いたら記憶消去だからな」

マリアの声に嘘はなかった。

だから雲井も約束する。

「ああ、絶対に指示に従う。絶対だ。」

時計を見るともう正午だった。

「ぐぐぎゅ〜」

二人同時に腹が鳴った。

「なんか食べていくか？」

マリアが提案してくれたが、雲井としては早く家に帰って気持ちの整理をしたかったので断った。

女の子の手料理は限りなく魅力的だったが。

マリアは玄関まで見送りしてくれた。

「大丈夫か？一人で帰れるか？」

なんだか心配してくれてたが、雲井は男の子である。家にくらい一人で帰れるのだ。

「大丈夫だって。近くに交番こうばんあるし、あの路地裏からこの家まであんまり離れていないんだろ？だったら俺の家も近いはずだから」

「魔術師らしきやつに出会ったら指示通りにしろよ。私が絶対に君は傷つかせないから」

「わかった。指示は守る」

そういつてから、おじやましましたーと言って玄関を出た。

どうやらここはアパートらしく玄関がたくさん並んでいる。

（ああ、本当にいろんなことがあったな。早く帰ってゆつくり休みたい…。っていうか、このアパートどこかで見たような…。）

雲井はさっきまでいたマリアの部屋の表札を眺める。

二〇八号室    マリア    ローゼンストック

（…偽名？いや、それよりも、二〇八号室って…。まさかね…）

雲井はゆつくりとぎこちないロボットのような動きで隣の表札のほうへ首を回す。

二〇七号室    雲井    透



(……………マジで?)

とりあえず雲井は自室に戻り、荷物を置き、頭の整理のために少々柔軟運動じゅうなんどうをして、隣の部屋に向かった。

「どうした、透? 迷子になったか?」

「マリア。緊急事態だ。魔術師なんて目じゃねえくらいいな」

八月二十日 午後十時

雲井透は自室のベッドで今日、自分の身の回りに起きた出来事を振り返っていた。

(魔術、か…)

今日の雲井透の出来事は『魔術』という言葉でひとくくりできた。様々なことが起きた。自分以外の人がいつの間にか消えていたり、変な弓あやみゆみ(梓弓あやみゆみと言うらしい)をもった老人に殺されそうになったり、なんやかんやで少女の上半身裸の姿を目撃したり。しかもこれらの出来事が全部、午前に起きた。それを含む様々な原因で、午後は気持ちの整理に時間を費やすことになった。

そのとき、アパートの二〇七号室の雲井の部屋の二〇八号室側の壁が誰かが叩いているような音を発した。

「おーい」

今日の『魔術』騒動の中心人物のマリアが隣の二〇八号室から声をかけてきた。これが気持ちの整理に時間がかかった原因の一つである。偶然にも雲井のお隣に引越してきた人物が今日の騒動の関係者だったのだ。これこそ、どこかの誰かが魔術でも使って自分をこんな状況に追い込んだのではないかと思う。

マリアは隣同士で会ったことを喜んでいて。マリアいわく

「敵の魔術師が透を狙って攻撃してきても、すぐに守れるから」  
らしい。

守ってくれるのは嬉しいのだが、隣に今雲井を混乱させている騒

ぎの主要人物がいるとなると、頭の整理がしづらい。しかも、マリアは暇になると今みたいに壁越かへこしに話しかけてくるから落ち着くことができない。

「おい、いるのか？透」

「あー、いますいます。今から寝ます」

雲井はそんなふうに適当に返してベッドの中に入る。いつもはもう少し遅く寝るのだが、今日はいろいろあって疲れたから、もう寝ることにする。

（『魔術結社』に『魔術師狩り』の少女が…）

ふと、雲井はベッドのそばに置いてある箱に目をやる。箱の中にはおじいちゃんの遺品の本やら道具やらが入っている。

（おじいちゃんならこの問題も楽に解決できるんだらうか…）

おじいちゃんには『理想』があった。隣の部屋にいるマリアという少女にも『理想』があった。それはゆるぎないもので雲井があこがれるものであった。

（俺にもそんな『理想』が持てるだらうか…。）

雲井は考える。雲井は今まで様々なことを投げだしてきた。自問じもん自答じたうの答えはわかりきっていたから雲井はすぐに考えるのをやめた。

## 第一章 魔術、ゴスロリ（後書き）

気に入ってもらえたでしょうか？

至らぬところも多いと思いますが、大目に見てやってください。

## 第二章 携帯電話、演技（前書き）

やっと主人公が活躍します。  
退屈させてすいません。

## 第二章 携帯電話、演技

### 第二章 携帯電話、演技

八月二十一日 午前七時

雲井はマリアの部屋にいた。

「それでは指示の確認をする」

マリアは昨日着ていたのと同じゴスロリの服を着ていて、朝早いの元気があった。

(またゴスロリ…)

昨日はいろいろあつて突っ込まなかったが、勇気を出して質問しようと雲井は思って、

「なんでゴスロリの服着てるんだ？趣味か？」

と聞くと、マリアは首をかしげて言った。

「ん？これのことか？別の服のほうが好みか？」

「いや、そういう意味じゃなくて…」

「これはな、『れいそう霊装』の一つだ。『れいそう霊装』とはその名の通り魔術的な装備のことで私のこの服には魔術的な記号が含まれている。つまり、装備したら戦闘力が上がる代物というわけだ」

どうやら少女がゴスロリなのはちゃんとした意味があったらしい。雲井としてはゴスロリは嫌いじゃないので、別にゴスロリ趣味でもよかったのだが、

「そ・れ・に……!!」

いきなりのマリアの気合の入った声に雲井はびくついた。

「ゴスロリは素晴らしき自己表現だ……!!」

マリアの突然の変化に雲井は口が開きっぱなしである。

「透！ゴスロリを着るには何がいるか知っているか……!!」

雲井の思考回路はすでにフリーズしているので何も言えなかった。

返事がないにもかかわらずマリアは叫ぶ。

「信念だ！！」

雲井は反応できない。

「ゴスロリはその特殊性ゆえに嫌でも目立ってしまう。それでも着続けるのはなぜか？それはゴスロリとは自己表現だからだ！だれにどういわれようと自分の信念を貫く自己表現だからだ！！」

その場の空気はすべてマリアが支配していた。雲井は何も考えられなくて、小さくうなずくしかできなかった。

マリアは言いたいことを言い終えたらしく、元に戻って

「話がそれってしまったな…。透、昨日私が渡したものを見せてくれ」と言った。

雲井は、さっきのことは忘れよう、と思いながらポケットから文字が書かれた一枚のカードを取り出す。

「そのカードも『霊装』の一種だぞ。カードに書かれている文字はルーン文字だ。そのカードには私の魔力を送り続けているから、いつでも魔術が発動できる。発動するには明確に『使用する』という意志をもってカードを触ればいい。カードに書かれている文字は『<sup>アンズル</sup>ansur』、神、情報を意味する文字だ。そのカードを使えば演技力が上がる。魔術によるものだから、普通では考えられないくらいにきることができ」

「敵の魔術師らしきやつらに出会ったらこれを使って、記憶消去されたふりをして逃げるんだよな」

「そうだ。敵の魔術師はおそらく君の顔を組織に報告している。しかし、私がもうすでに君の『魔術』に関する記憶を消去したと思っているだろう。だから君が町中でやつららしき人間を見たらすぐにこれを使ってからその場を離れて私に報告してくれ」

「やつら、『天孫降臨』と一般人を見分ける方法は…」

「君に不自然に接触を試みるものを疑え。道を聞いてきたり、突然ぶつかってきたりしたものは高確率で『天孫降臨』だ。やつらの大半は私が倒してきて、今は君が知っている梓弓の魔術師を含めて三

人だ」

「三人…。お前、頑張ったんだな」

雲井がそういうと、なぜかマリアは顔を赤くして

「ま、まあな。私は自分が魔術師の中でもかなり強いほうだと思っている。私にかかれば、百人近くいた魔術結社など相手にもならない」

(百人近くいたのか…)

つまり、少女は九十人余りの魔術師を一人で倒してきたことになる。雲井は自分がいなくてもこの問題は解決するのではないか、というか自分は足手まといでしかないのではなからうかと思っていたが、

「そう、相手にならないと思っていたんだがなあ…」

マリアの声が一気に弱気になった。

「どうしたんだ？」

と雲井がきくと、

「タイムリミットが迫っているんだ」

「タイムリミット？」

「やつらは日本を『支配』することで『平和』にしようとしていると昨日話したよな。じつはそのための大規模魔術だいきぼまじゅつが発動されそうなんだ。魔術名は『天孫降臨』」

「組織名と同じだな」

「どうやらもともとこの魔術を発動するために生まれた組織らしい。今まで手に入れた情報によると発動するのは明日の正午」

「明日！？発動すると何が起こるんだ」

「それはまだつかんでいない。ただ日本が『支配』されるとしか…」  
「それってやばいんじゃないか？」  
「明日の正午まで逃げ回られたらおしまいじゃないか！」

「それはない。『天孫降臨』には莫大な『界力』が必要だよだ。

『界力』は『世界の力』から精製されるもので、『世界の力』である『地脈』の力が強いこの周辺からやつらは離れられない」

「『地脈』？そういうものとかは『恐山』とかそういうところが高  
いってテレビで言ってた気がするけど」

「そうだ、ここ一帯には強い『地脈』が流れているが『恐山』には  
遠く及ばない。しかし、そういう大きな力をもつ場所は天台宗や曹  
洞宗といった大きな組織に管理されているからな。こっそりするに  
はここがちょうどよかったんだよ」

「お前、『薔薇十字団』って組織にいるんだろ？こんなにやばいこ  
とになっているのに何で応援を呼ばないんだ？」

「『天孫降臨』の効果で日本を支配すること、発動が二十二日の正  
午であることはつい最近知ったんだ。すでに応援は呼んでいるが多  
分、間に合わない」

雲井は思う。…どうやら問題は自分は思っていたよりも大きいよ  
うだ。というか急展開だ。

「しかし、そこで君が現れた」

マリアは話を続ける。  
「少しだけだが、この絶望的な任務の成功率が上がった。協力、感  
謝する」

いきなりかしまった口調でお礼を言われて雲井は慌ててしまっ  
た。

「は？いやいや、こつちが協力したいって無理やり頼み込んだよう  
なもんだし、お礼なんていって！」

「そうか？じゃあ街に魔術師を探しに行ってくれ」

(…ちやつかりしてやがる)

雲井ははめられた少しの敗北感を感じながらマリアの部屋を出た。

八月二十一日 午前九時

あれから二時間、雲井は街を探索し続けていたが敵の魔術師らしき  
ものは見当たらない。

「簡単に見つかるわけがないか…」



とつぶやいたとき、雲井は目の前の人ごみの中に見たことのある影がいることに気付いた。

「あいつは…」

昨日、雲井を殺そうとした弓の魔術師だった。今は雲井とは反対方向を向いていてこちらには気づいていないようだ。

雲井は何気ない素振りですぐポケットに手を入れる。

（『使用する』！）

そう念じながらポケットの中のカードに触った瞬間、透は自らの体の中から追い出された…様に感じた。自分の体がゲームで操作しているキャラクターのように自由に操れる。今の自分ならどんなモノマネも鳥肌が出るようなくさいセリフもどんと来いだと雲井は思った。

再度、あの老人がどこにいるか探そうとしたとき、老人が自分の視界から消えていることに雲井は気がついた。

（見失ったか…）

突然、雲井の背を叩いてくるものがいた。

「あのう…」

雲井が振りぬくと見失ったはずの老人が後ろに立っていた。

（うわあ！！）

雲井は意表を突かれて驚愕した。しかし魔術の効果で、心の中では慌てていたが表情にも出ず、心音も正常だった。

（すげえ…）

雲井は今の自分なら俳優として成功できるのではないかと思っただけ、目の前の老人に意識を集中させることにした。

「え、俺ですか？」

雲井は、はたから見ると老人とは初対面だと思えないような人が見知らぬ人に話しかけられたとき特有の雰囲気をもとって答えた。

「はい、あなたです」

老人はしわがれた声で肯定した。

「すみませんが、この近くに休めるような公園はないでしょうか。久しぶりに散歩してみたら足が痛くなつて」

その仕草には雲井を殺そうとしたときの面影は全くなく、別人のようだった。

（これがプロか…）

雲井はそんなことを思いながら、ここをまっすぐに行けば円山公園まるやまという小さな公園がありますよ、と答えてやる。

「ありがとうございます」

そんなことを言って魔術師であろう老人は離れていった。

（うまく俺が記憶消去されてると思わすことができただろうか…？）

雲井がそう考えながら、何気ない顔を演技し続けていると携帯電話が鳴りだした。

（マリアからか）

雲井はそう確信しながら携帯を開く。やっぱりマリアからだった。何故確信していたかと言うと、

作戦1 カードの魔術を使って魔術師をだました後、マリアが十分後くらいに電話をかけてくる。

そして事前に決めた合言葉あいことばで状況報告。

「作戦成功」は電話に出たときに「もしもし」

「作戦失敗」は電話に出たときに「誰？」

その後、家に戻る。

マリアいわく、カードの魔術はマリアが作ったものだから、使用されたことはわかるらしい。そして、その言葉は真実であつたらしく、ちょうどよい時間に電話がかかってきた。

雲井は「作戦成功」とマリアに伝えるために電話に出て「もしもし」と言う。「ああ、透。早く家に帰ってこい」とマリアが言う。

このマリアのセリフも前から決めていたことである。会話の内容

から敵に察知されないために、作戦の成功失敗に関わらずこのように言うことになっている。

雲井はそのまま家に帰ろうとした。

「あれ…？」

ふと、異変に気づく。

（人、減ってきてない？）

魔術師は一般人にその存在を知られてはならないために、人が多い所で行動するとき『人払い（opelia）』を使うらしい。

「マリア…。なんだか俺以外の人が減ってきているんだけど…」

「なに?! すぐに人ごみのほうに走れ! 透」

雲井は携帯電話をたたんで、言われたとおりに人ごみのほうに走る。しかし、走った方向の人ごみが魔術のように減っていく。というか実際、魔術である。

「やばい…」

「誰と話していたのだ? 小僧」

背後から声がした。

あの老人がすぐ後ろを走っている!

手には、おそらく『霊装』であろうあの梓弓あずさゆみをもち、さっきまでの普通の服とは違った神社の神主風の服を着ている。

「言わなくてもわかるわい。あの『薔薇十字団』ローゼンクロイツの雌犬めすいぬであろう?

何故あの者は我らが日本を平和へ導くのを邪魔しようとするのか…  
皆目見当がつかん!

雲井は老人の話など聞いてはいない。ただ、人ごみのあるほうへ走る。

「どうやら、『魔術』で記憶が消えているふりをしていたようじゃが、相手が悪かったのう。わし、各務かがみ玄けんい以は『天孫降臨』一の眼力をもつ男。そうそう騙せんで」

雲井は走る、走る。

「ほほう、なかなか頭がいいのう、お主。確かに人ごみのあるほうに走り続けられ、わしはお主に手が出せんが…。いつまでお主の体

力が持つかのう？」

雲井は人ごみへ走り続ける。

「ちくしょう、あんたに言った円山公園を通り過ぎちまったぞ！」

雲井は老人、各務に話しかけた。

もう少し、走る速度を落としたほうがいいかと思ったが、それは駄目だった。これ以上遅く走ったら消えていく人ごみに置いていかれて後ろの老人に仕留められる！

「ほう、では戻って休んでいくか小僧？」

(遊んでやがる…！)

雲井は屈辱を感じながらも走り続ける。

「中上川ビルの前まで来ちゃった」

かれこれ走ること30分。

雲井は結構、持久走には自信があるのだが、後ろにいる老人を振りきれない。それどころか、かなり余裕だ。このご老人、かなりの健康体だ。

「小僧、お主、近ごろの若い者にしてはなかなか体力があるのう。しかし、わしはフルマラソンで鍛えておるからのう。潔くあきらめたらどうじゃ？」

雲井は顔に絶望を浮かべて走る。

「と、図書館まで走っても駄目なのか…」

雲井の表情は絶望から諦めに変わっている。

ついに雲井は立ち止った。

人ごみに置いていかれる。

人影は各務と雲井のものしかなくなっていた。

「ようやく諦めたか…。しかしよく頑張ったほうじゃよ。誉めてやる」

各務の拍手が人がいなくなり静かになった空間にただ一つ騒がし

く響く。

雲井の顔には諦めしか浮かんでいない。

各務は何もつがえていない弓を雲井のほうにむけて、照準を合わせる。獲物が決して逃れられないように、

「安心しろ。殺しはしない。この梓弓は本来、巫女をトランス状態に導き、神を降ろす手伝いをするものでな、精神攻撃に長けておるお主をしばらく眠らせてから、ゆっくりと心の中からあの小娘の情報をいただくことにするわい」

各務は弦から手を離すと同時に呟いた

「睡魔の弦」

次の瞬間には、雲井の体は明らかに自然のものではない不気味な風に貫かれていた。

雲井の体がうつ伏せに崩れ落ちる。

(さて、まずは本部に連れ去ってから心の中をのぞくとしよう)

各務は雲井に近づいて、後ろから抱き上げようとした。

少年の体はピクリとも動かず、もう意識が完全に消えているように見えた…が、

「クククククク…」

意識が消えているはずの少年が笑った。

「まさか…」

各務は驚愕する。魔術による精神攻撃を受けて、それでも意識を保つにはかなりの精神力がある。魔力もない普通の人間のはずの少年にそんな力があることは考えられなかった。

雲井は顔をあげて各務玄以の顔を見上げる。その目は虚ろでいまにも気を失いそうだった。

そんな顔で雲井は口を開く。

「かかったな」

「なに！」

そう宣告する少年の顔は勝利の確信に満ちていた。さっきまで、諦めの念に支配されていた顔には、もう負の感情のかけらも残って

いなかった。

「さつきまでの諦めの表情は…。まさか！」

「そうさ、『演技』してたんだよ。魔術でな！」

そう、『情報（ansur）』のルーンのカードによる魔術は、魔術師に演技がばれてからも継続していた。雲井は逃げながら追い詰められている『演技』をしていたのだ。

「…騙された。確かに騙された。小僧、お主、見上げたもんじゃな。わしの眼力も衰えたもんじゃわい。しかし、わしを騙せてもお主の勝利ではないぞ？」

「足音が聞こえないか？」

そう言われて各務が耳をすませると確かに足音が聞こえてくる。

雲井がふざけた口調で話した。

「問一、あんたから逃げるとき、喋る必要がないのに俺がいちいち喋っていた理由はなんでしょう」

「あ…」

各務は思い出した。少年がここに来る間、時折、自分に話しかけたり、独り言を言ったりしていたことを

「ヒント、俺の携帯電話はつながりっぱなしです」

各務は気づく。少年が喋るとき、円山公園、中上川ビル、なかみがわ図書館、といった自分が現在いるところを必ず声に出していたことを。

（まさか…。こやつ狙いは…）

「後は頼んだぞ…マリア…」

雲井はそういった後、目をつぶり、音を立てて顔を地面につけた。各務は確信する。

（こやつ狙いは…）

足音の主はもう見えるところにいた。

「透！」

緑の混じった漆黒と紅のゴスロリの服を着た『ローゼンクローイツ薔薇十字団』所属の魔術師、マリア・ローゼンクローイツがそこにいた。

（仲間に自らの場所を知らせることか！）



を見て思った。

（お年寄りは大切に…）  
そこで雲井の意識は切れた。

「…い……おい！透！しっかりしろ！」

雲井はマリアの呼び声で目が覚めた。

「ん……………何だ？」

「良かった、起きた…」

「うん…？」

起きたはいいが、雲井はなんだか意識がはつきりしなかった。

（ああ、そうか。俺、魔術師に追われていて。それで、マリアに助けてもらったんだ）

雲井の脳裏に意識が消える直前に見た魔術師の姿が浮かんだ。マリアの攻撃は半端はんぱなかつたが彼は無事だろうか？と雲井は少し心配になった。なんせ、マリアの魔術はルーンのカードの光が多すぎてロボットアニメの極太ごくふとレーザーみたいになっていた。

「なあ、あいつはどこに行ったんだ？」

雲井があたりを見回しても、あの梓弓の魔術師は見つけられなかった。

「あいつ、誰のことだ？」

きょとんとしたマリアの顔は泣いた後のように赤かった。というか、実際に泣いていたのかもしれない。雲井を呼び起していた時の声は軽く震えていた。

（心配かけちゃったな…）

雲井は少女の役にも立てずに助けてもらいながら、少女の精神的負担を大きくしてしまった自分の弱さに腹が立った。

「ああ…。あの魔術師のことか…」

マリアはそんな雲井の心境に気づかず話を進めていく。

「闇やみに葬むすってやった」

「は…？」



最初、雲井はマリアの放った言葉の意味がわからなかった。

(闇に葬った？どういうことだ？闇に葬った、闇に葬った、闇に葬った、闇に葬った…)

雲井は混乱していたが、しばらくしてその言葉の意味に薄々(うすうす)気づき始めた。しかし、認めななくなかった。

「闇に葬った？はは…意味がわからないな…」

雲井はそう言ったが、顔は嫌な汗をかいていた。もう理解していた闇に葬る、その言葉の意味は…

(殺したのか…)

雲井は知っていた。少女が生きるのはそういう世界だと。情も情けもあつてはならない世界だと。その世界で生きる少女の横顔はとも辛そうで、だからこそ、雲井は少女の手助けがしたくなつたということを。

しかし、雲井は理解をしなかった。自分と同じくらいの少女がそんな世界にいるはずないと心のどこかで否定していたのかもしれない。その目をそらしていた現実が、今、目の前に急に現れた。目をそらしたい、そらしてはいけない。

雲井がその現実を受け止めるために覚悟を決めようとした時だった。

「殺してはいないぞ」

マリアが、してやったり、とても言いたそうな顔で言った。

「……？」

雲井は声が出ない。

「だから殺してないと言ったのだ。やはり、こう言えば騙されたな」

「お、お前…言っている嘘うそと悪い嘘が…」

雲井は正直かなり怒っていたのだが、突然の状況変化についていけず、顔が引きつるだけだった。

「嘘は言っていない」

マリアは雲井の反応に満足しているようで、軽く上機嫌で言った。

「私の空間 (opilia) のルーンで魔法の使えない暗黒の空間に閉じ込めたのだ。今までに倒した『天孫降臨』の魔術師もこれで動

きを封じている。この魔術は準備に時間がかかるから、実践では使えないがな」

「マリアは淡々と話しているが、雲井にはそんなことは関係ない。雲井の堪忍袋かんにがくろの緒はとうの昔に切れている。」

「マリア！いい加減にしるよ！俺がどんな思いで……」

「いい加減にしる、はこつちのセリフだ！」

「マリアの表情が一変した。」

「なぜ、あんな危険な真似をした！私の魔術が敵にばれたのは私の責任だ！だから私に助けを求めたまではない。だが何故なぜ相手の魔術師の邪魔をした！おまえがあのまま意識を失っていたら、相手は前にあれ以上攻撃しようとはしなかったはずだ！」

その剣幕に雲井の怒りは一気に引っ込んでしまった。

「い、いや……手助けがしたくて……」

雲井は素直に自分の気持ちと言ったが、

「手助け？手助けなど必要ない！君は自分の心配だけしてればいいんだ！それとも私は魔術の素人の君に心配されるほど頼りないか！？」

「違う……、信頼してないわけじゃない……」

「なら、何故……！」

そこで突然マリアは口を止めた。

「……………」

「……………」

「気まずい空気が流れる。」

「すまない、怒りすぎた」

「マリアが口を開いた。」

「君に悪意があったわけじゃない。私への好意のために行動してくれたのはわかる。しかし、魔術の世界には人の思いなど関係ない。だから君は、人の思いが通用する世界に戻れ」

雲井は首を振った。

「嫌だ……。確かに今回は失敗した。無茶な事をした。だが次はもう

無茶なことはしないから……」

マリアは悲しそうな、しかしゆるぎない声で答える。

「駄目だ、もう駄目だ。君が人のために命を賭けることができるやつだとわかってしまった。そんな奴に私の手伝いをさせるわけにはいかない」

マリアは懐からルーンのカードを取り出して雲井にむける。おそらく、記憶消去の効果をもつルーンだ。マリアの目には迷いはない。ルーンのカードが光り出す前に、雲井は口を開いた。

「俺は指示に背いてないぞ」

そのセリフがとても卑怯ちひせうなものだと、雲井は気づいていた。しかし、雲井は忘れなくなかった。この記憶を。そのためなら卑怯者の称号を背負ってもいいと思った。

マリアはルーンのカードを雲井に向けたまま黙っている。

「俺はお前の指示に背いていない。だから、記憶消去は勘弁かんべんしてくれないか？」

マリアは雲井を見つめている。

雲井はここで目をそらしたらいけないと思った。そらしたら、卑怯者以上に不名誉な称号を背負うことになりそうな気がした。

「……………いいだろう」

マリアが口を開いた。

「しかし、『天孫降臨』を倒したあとは、どんな事情があるうとも記憶を消すぞ。もともとそういう約束だったしな。もちろん、このことは他人に話すな」

マリアはそう言うと、人間離れたスピードで遠くに走って行った。

雲井は立ち尽くしていた。しばらく時間がたって、『人払い（oppila）』の効果が切れて、あたりに人が増え始めてからようやく歩き始めた。

その足取りは重かった。しかし、力強ちからづよいかった。まるで、何もあきらめてないかのように……。

**第二章 携帯電話、演技（後書き）**

第三章は執筆中です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7174h/>

---

とある魔術の薔薇十字（ローゼンクロイツ）

2010年10月10日03時47分発行